

「膵管像からみた膵疾患の臨床と病理」

福岡大学教授・第1外科 池田 靖洋 著
 新潟大学教授・第1病理 渡辺 英伸 執筆協力
 新潟大学医学部第1病理 古田 耕

最近の画像診断技術の進歩には目をみはるものがある。ボディイメージングという比較的侵襲の少ない診断法にその成果をみることができるが、膵の微小病変の診断には何と言っても膵管造影が切り札となる。ERCPが開発されてから、既に20年以上経過した。開発当初、きれいに造影された膵管像を初めて見せられたとき、「これで小膵癌がどんどん見つかる」と期待したのは筆者ばかりではないと思う。しかし、現実にはそれほど甘くはなく、小膵癌の診断には四苦八苦しているのが現状である。その原因は、多くの場合微細変化の読影に耐える鮮明なERP像が得がたいことにある。

著者の池田靖洋教授は、「内視鏡下留置バルーンカテーテルによる膵管造影—背臥位圧迫撮影法」を開発してERP診断能の向上を目指してきたこの分野のパイオニアである。本書には著者が自らERP検査を行い、あるいは手術を施行した69症例が珠玉のごとく提示されている。

本書の特長は、1. 著者の開発した内視鏡留置バルーンカテーテルを駆使した極めて鮮明な膵管造影像の呈示、2. 膵疾患別ではなく膵管の

異常像別にまとめた記述、3. 同一症例の切除標本の肉眼所見および組織所見の対比にある。ここに収載されているERP像は、すべて著者が直接携わって丹念に経過を追ってきた症例のもので、ファイバースコープに邪魔されず、圧迫や体位変換で得られた鮮明な膵管充満像が提示されており、これだけでも一見に値する。

本書は豊富なカラー写真と膵管像で満たされているが、基本構成は表紙の写真に象徴されている。すなわち、バルーンカテーテルを用いた圧迫法による膵管像と標本断面の肉眼所見、組織所見の3点セットの絶妙な組み合わせとなっている。画像の読影力を深めるには、その異常所見に一致する標本の臨床病理学的異常をつぶさに検索し、その作業を積み重ねていくことに尽きる。また、それは臨床トレーニングの原点でもある。その意味で本書は膵管像の読影力を飛躍的に深めると同時に、読者を臨床トレーニングの出発点に引き戻す効果も有している。先に述べたように、本書は豊富なマクロ、ミクロの写真を用いて膵管像の異常を簡潔な記述で明快に解説しているが、

執筆協力者として新潟大学第1病理グループが関わっていることが各症例の理解をしやすいうえで大きく貢献している。

さて、本書には哲学がある。著者は冒頭で「良い症例、良い写真こそ、教師であり教科書である」と述べているが、膵管像の読影力を深めることは、単に良性・悪性鑑別困難な症例を正診に近づけることだけではない。著者は外科医であるが、わずかな良性所見を見逃さず膵切除を控えるのである。膵癌を強く疑わせるが1本の3次分枝膵管の所見から手術を見合わせ、7年間経過観察した症例の記述や、膵ラ島腫瘍の膵管像の分析は圧巻である。患者に学び、その成果を患者に還元する、また、不必要な操作や侵襲を極力回避するという謙虚な精神が底流となっている。それが本書を永年かかって完成させた原動力となっているのである。

本書は、タイトルからはシャープな膵管像をもとにした病理のテキストブックとなるものではあるが、一方、病理学的見地から第2次、第3次分枝レベルの膵管像を浮き彫りにしており、膵管像に対する従来の認識を一変させるものである。膵臓病学の専門医のみならず、広く消化器病に携わる内科、外科医、研修医にぜひ一読をお薦めしたい。

（東北大学教授・第1外科）
 松野 正紀

●A4変型 368頁 図41 写真348
 原色図261 1991年 定価29,870円
 （税込）〒400円

医学書院 刊 (☎ 03-3817-5657)